

令和 2 年 7 月 1 日現在

機関番号：12102

研究種目：国際共同研究加速基金（国際共同研究強化）

研究期間：2016～2019

課題番号：15KK0036

研究課題名（和文）デカルトによる批判的受容を背景にしたピエール・シャロン人間学に関する哲学史的解明（国際共同研究強化）

研究課題名（英文）Descartes's Critical Reception of Pierre Charron's Anthropological Thoughts: its Historical &amp; Philosophical Perspectives(Fostering Joint International Research)

研究代表者

津崎 良典 (Tsuzaki, Yoshinori)

筑波大学・人文社会系・准教授

研究者番号：10624661

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 6,600,000円

渡航期間： 13ヶ月

研究成果の概要（和文）：本研究は、モンテーニュ、シャロン、そしてデカルトにとっての共通の対話者であった古代ストア主義の16世紀ヨーロッパにおける復興の解明という問題関心から、彼らは（政治論的/道徳論的）人間学という主題に関する限りでセネカの思想をいかに受容・修正・活用したのかという問いに取り組んだ。そのために、彼らの著作で用いられている主要な概念について、その対応関係と位置情報を示すべく、テキストを可能な限り配列させたコンコードダンスの作成を開始した。そのうえで《情念の支配》（幸福論を含む）、《死の修練》、《精神の修練》としての読書、《パラスケウエー》という主題に関する哲学史的解釈学を遂行した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

研究代表者が2013年度に組織した筑波大学リサーチユニット「東西哲学における修行の系譜学」と国際共同研究者が2009年度に組織したパリ第一大学リサーチユニット「デカルト研究会」のあいだに協力関係を構築したことにより、国際共同研究者の背後に聳え立つフランス人文学の伝統の蓄積が、日本人研究者に分け与えられ、日本の近世哲学史研究の手法の多角化と重層化が期待される。さらに、その学術的ネットワークが各国に及び国際共同研究者を介して、日本人研究者が諸外国の研究者と国内外で積極的に共同研究する可能性が開かれ、日本の近世哲学史研究のいっそうのグローバル化とネットワーク化も期待される。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this research project was to elucidate how Montaigne, Charron and Descartes received and transformed Lucius Annaeus Seneca's philosophy, and then to show how these three French thinkers applied it for the development of their own anthropological thoughts (which could be considered from a political or moral point of view). To achieve this, a concordance of their work was compiled to arrange a large number of important concepts and/or subjects in order to list all related citations from these thinkers' books, and to show the intertextuality between them with special focus placed on being a master of one's own passions including happiness, the exercise of and training for death, learning to read as a spiritual exercise, and the analysis of 'paraskeue'.

研究分野：西洋近世哲学史

キーワード：モンテーニュ シャロン デカルト セネカ 新ストア主義 人間学 精神の修練

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

## 1. 研究開始当初の背景

本国際共同研究は、科研費若手研究 (B) の研究課題「デカルトによる批判的受容を背景にしたピエール・シャロン人間学に関する哲学史的解明」(以下、基課題と略称) の終了を受け、そこで検討課題として浮かび上がってきた論点に傾注すべく企図されたものである。基課題では、モンテーニュ (1533年-1592年) の強い思想的影響圏にあったシャロン (1541年-1603年) の《人間学》について、その最良の注釈者であるデカルト (1596年-1650年) を導き手に、その全体像を解明することを目指した。その過程で、モンテーニュ、シャロン、そしてデカルトにとっての共通の対話者であった古代ストア主義の、16世紀ヨーロッパにおける復興の具体を解明することが不可欠ではないか、つまり彼らは、人間学という主題に関する限りで古代ストア主義をいかに受容かつ修正し、そしてフランス哲学黎明期に特徴的な人間学の新体系構築のために活用したのか、という問いに取り組む必要性に気づかれた。16世紀ヨーロッパに復興した古代ストア主義の哲学者は主として、セネカ、エピクテトス、マルクス＝アウレリウスであったが、最も関心を集めたのはセネカであった。したがって、16世紀後半から17世紀前半のヨーロッパにおけるセネカ哲学の受容と修正の具体を解明することが、本研究課題の開始当初の背景であった。

## 2. 研究の目的

本研究課題の目的は、従前の西洋哲学史研究においてすでに十分な関心を集めてきた所謂《12世紀ルネサンス》(とスコラ学の誕生)ならびに《14世紀ルネサンス》とは区別してそれ自体において考察すべき歴史的事象として《16世紀ルネサンス》(と人文主義の誕生)に着目することで、近世(英語: early modern)と呼ばれる時代区分に特徴的な哲学的営為の多様な源泉の一つをそのうちに求め、かつ、詳らかにする取り組みの一翼を担うことである。この場合の《ルネサンス》とは、古代懐疑主義(ピュロン主義とアカデメイア学派)、エピクロス主義、そして本研究課題が関心を寄せる古代ストア主義の復興であり、それが近世哲学の生成と展開に果たした役割を多角的に解明する研究に本格的に参入することは、この時代に活躍したデカルト、スピノザ、ライプニッツなどの《天才》(A. N. ホワイトヘッドによる見立て)を論じれば事足りるとする従来の西洋哲学史研究に修正を迫るはずである。いかに独創的な思想もそこには必ず過去の偉大な固有名詞との対話があると考えられるからである。

## 3. 研究の方法

古代ストア主義に関する書籍の当時の出版状況から判断できることは、フランスの知識人がこれに最も強い関心を示したのは1590年代から1640年代までだ、ということである。それ以前については、1515年から始まる準備期間として、そして、それ以後については、古代ストア主義への関心が薄れていく過程として捉えることができる。したがって、《新ストア主義》という思潮の準備期間からモンテーニュを、その最盛期前半からシャロンを、そしてシャロンに代表される《キリスト教的ストア主義》に対する応答として、その最盛期後半からデカルトをそれぞれ選出することで、研究対象の画定とした。

また、基課題では人間学的考察と言われる場合の人間学を《政治論的人間学》と《道徳論的人間学》に二分して考察することの研究計画上の有効性は確認済みであるため、本研究課題でもこれを踏襲することで、解明作業の体系化と多角化を目指した。

以上を具体的にまとめるなら、本研究課題の方法は、[1] 一方でセネカ、他方でモンテーニュ、シャロン、そしてデカルトの著作で用いられている主要な概念と主題について、その対応関係と位置情報を示すべく、関連テキストを可能な限り配列させたコンコーダンスを作成することである。ついで、[2] このコンコーダンスを活用して、一方でセネカ、他方でモンテーニュ、シャロン、そしてデカルトにおける人間学に関する限りでの問いの連続と断絶を論じる哲学史的解釈学を遂行することである。

上述のように本研究課題は、フランス哲学黎明期におけるセネカ哲学の受容、批判、および新体系構築のための活用を分析するものであるが、国際共同研究のための渡航先に選定したフランスは、当該主題に関する研究資料、研究者人口、学会や研究会などの開催数、研究成果の公表数といった量の面からも、また、研究史を刷新するような斬新な主題設定という質の面からも、科学研究費助成事業データベースによれば関連主題についてこれまで科研費をうけた研究課題の存在しない我が国の諸大学の追随のみならず、人文学研究において極めて潤沢な資金を有するアメリカの諸大学の追随すら許さない。そのなかでも強力に研究を牽引している機関がパリ第一大学であり、その近代哲学史講座主任教授を務めているのが国際共同研究者のドゥニ・カンブシュネル教授である(2018年度をもって定年となり、現在は名誉教授)。研究代表者は、同氏が運営しているリサーチユニット「デカルト研究会 (Séminaire Descartes)」に日本側連携会員として当ユニット創設時から参加しており、定期的な研究交流をすでにもっている。とりわけ本研究のパートナーには、デカルトのみならず、モンテーニュ、シャロンについても深い学識を有していることが求められるため、当該主題について多数の研究成果を発表しているカンブシュネル教授は最適任であると判断した。

## 4. 研究成果

モンテーニュとセネカに関する哲学史的解釈学の古典的研究は P. Villey のものであり、研究代表者も当然この研究成果は消化済みであったが、本研究課題遂行中に、C. H. Hay が1938年

にポワチエ大学に提出した博士論文 *Montaigne : lecteur et imitateur de Sénèque* の存在を発見、その批判的解読を開始したが、研究課題期間中には十分に終わることができなかつたため、分析を継続することとした。と同時に、モンテーニュによるセネカの批判的受容が認定される『エッセー』各章のうちとりわけ第1巻第22章ならびに第2巻第32章の集中的な分析も開始したが、その成果を論文として発表できるところまでは至っていない。

シャロンについては、未邦訳の著『知恵について』が、校訂版では900頁近くあり、近代フランス語の形成期にあたるフランス語で執筆されているため、解読に予想以上の時間を要している。したがって、全体像を詳細に掴むまでに至っていないのが現状であり、全体像を掴んだうえで初めて可能となるセネカとの哲学史的解釈学の試みは、研究課題期間中に着手することはできなかった。

モンテーニュとシャロンに比してデカルトについては、研究代表者がこれまで最も傾注して研究してきた対象であるため、その蓄積もあり、以下の成果をあげることができた。

《道徳論的人間学》では、人間は自己といかなる種類の内在的関係をいかなる手段で取り結ぶのかという問いが論じられるが、この問いを具体的に展開する主題のうち、[1]《(主体の自己に対する)教育》、[2]前項に関連する主題である《読書》、[3]《死の修練》、[4]《幸福》の各主題について、デカルトとセネカの間テキスト性を解明する作業を行なった。以下、簡単に敷衍する。

[1]: デカルトの1645年9月15日付エリザベト宛書簡では、古代哲学における《パラスケウエー》という問題構制が下敷きにされていることを発見し、その淵源をセネカの『道徳書簡集』に求めた。このギリシア語を *instructio* とラテン語訳したのが、他にもないセネカだったからである。

[2]: デカルトのヴォエティウス宛書簡における読書論をセネカの『道徳書簡集』と比較対照する研究を進めた。

[3]: デカルトの1646年11月1日付シャニュ宛書簡におけるセネカ『テュエステス』への言及を根拠に、《人間学》において《死の修練》が有する価値と意味を分析した。

以上三点の成果は部分的にはあるが、『デカルトの憂鬱』(扶桑社、2018年)のうちに発表した。(なお、この書物の縮刷訂正版を2020年3月に『デカルト 魂の訓練』として刊行したが、本書には、本研究の枠組みでフランスに滞在していたあいだにヨーロッパ各地で行なったデカルト関連史跡(生家、アムステルダムでの滞在先、ストックホルムでの滞在先、埋葬地、墓標、デカルトの肖像画を所蔵する美術館、その頭蓋骨を所蔵する博物館など)の調査報告を盛り込んだ。)

[4]: デカルトは、セネカ『幸福な生について』に関する自身の見解を披瀝する、王女エリザベトとの往復書簡において、さらには情念の統御という古代ストア派の哲学者たちに親和的な主題を、しかし道徳論者としてではなく自然学者として解明する晩年の著作『情念論』において、古代ストア主義をいかなる仕方を受容・修正・活用したのか、この問いの解明を進めた。

共同研究者のデカルトに関する研究書 *Descartes n'a pas dit* の日本語訳(本書は、本研究課題の主題である《人間学》に関連する論点を複数個論じており、以上がデカルト人間学のすべてを構成するわけではないにしても、その主要なものであることにはかわりないため、セネカ人間学の諸論点のリスト化と比較対照に有益)、L. Devillairs 氏の *Descartes* (本書は、とりわけデカルト神論を主題的に扱うものだが、《道徳論的人間学》の理解を深めるためにも有益)の日本語訳、ならびに A. Negri 氏の *Descartes politico* (本書は、これまで不在とされてきたデカルト政治学を取り上げるものだが、デカルトにおける《政治論的人間学》の理解を深めるために有益)の日本語訳をそれぞれ進め、共同研究者の研究書以外はいずれも、在外研究中の2019年度に刊行することができた。共同研究者のそれも完成原稿を出版社に提出済みで、2020年度中に晶文社より刊行予定である。

在外研究中には、項目3に記載の「デカルト研究会」にすべて参加し、最新のデカルト研究の成果について知見を深めると同時に、アメリカ、イギリス、オランダ、イタリア、フランスの代表的なデカルト研究者との意見交換を積極的に進め、グローバルな研究者ネットワークの構築に努めた。それ以外にも本研究課題に少しでも関係する国際研究集会や国際学会には積極的に参加し、情報収集とネットワークングに努めた。本研究の波及効果として当初期待されていた成果を一定程度あげることができた。

さらに、モンテーニュとデカルトに関する教科書用の解説と事典項目用の記事も執筆した。また、イマジニア株式会社が運営するインターネット番組「10MTV オピニオン」用に、デカルトに関する解説動画と教材も作成した(全7回16話)。その他にも株式会社フジテレビジョンのパリ支局長からデカルトについて取材をうけ、インターネットの記事として連続配信されるなど、研究成果を広く社会に還元するアウトリーチ活動にも積極的に取り組んだ。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 津崎良典	4. 巻 22
2. 論文標題 モンテニユ神論における中世末期ノミナリズムの痕跡	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 『フランス哲学・思想研究』	6. 最初と最後の頁 28-40
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 津崎良典	4. 巻 699
2. 論文標題 デカルトによる精神の修練と高邁の徳について	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 『理想』	6. 最初と最後の頁 127-138
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計10件

1. 著者名 津崎良典	4. 発行年 2018年
2. 出版社 扶桑社	5. 総ページ数 274 p.
3. 書名 デカルトの憂鬱：マイナスの感情を確実に乗り越える方法	

1. 著者名 ロランス・ドヴィレール、津崎良典	4. 発行年 2018年
2. 出版社 白水社	5. 総ページ数 215, ivp.
3. 書名 デカルト	

1. 著者名 TSUZAKI Yoshinori et al.	4. 発行年 2018年
2. 出版社 Bardi Edizioni	5. 総ページ数 401 p.
3. 書名 Curiosity and the Passions of Knowledge from Montaigne to Hobbes	

1. 著者名 アントニオ・ネグリ、中村勝己、津崎良典	4. 発行年 2019年
2. 出版社 青土社	5. 総ページ数 254, 134p.
3. 書名 デカルト・ポリティコ	

1. 著者名 津崎良典ほか	4. 発行年 2019年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 v, 222p.
3. 書名 よくわかる哲学・思想	

1. 著者名 津崎良典	4. 発行年 2020年
2. 出版社 扶桑社	5. 総ページ数 274 p.
3. 書名 デカルト 魂の訓練：感情が鎮まる最善の方法	

1. 著者名 ジャンニ・パガニーニ、津崎良典ほか	4. 発行年 2020年
2. 出版社 知泉書館	5. 総ページ数 -
3. 書名 懐疑主義と信仰：ボダンからヒュームまで	

1. 著者名 ドゥニ・カンブシュネル、津崎良典	4. 発行年 2020年
2. 出版社 晶文社	5. 総ページ数 -
3. 書名 デカルトはそんなこと言っていない	

1. 著者名 津崎良典ほか	4. 発行年 2020年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 -
3. 書名 現代フランス哲学・思想事典	

1. 著者名 津崎良典ほか	4. 発行年 2020年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 -
3. 書名 ひろがるフランス文学	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

## 6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
主たる渡航先の主たる海外共同研究者	カンブシュネル ドゥニ  (Kambouchner Denis)	パリ第一大学バンテオン＝ソルボンヌ校・Department of Philosophy・Professor	